

総題を掲げる歌群

——大伴家持論序説——

朝比奈 英 夫

一、総題を掲げる歌々

万葉集末四巻は、日次の順にしたがって歌を掲載し、かつ、各々の歌に題詞を付することを原則とする。その中において、巻十九の四一五九〜四一六五の歌は、題詞を持つ四つの歌の前に、それらをさらに大きく包括する総題を掲げている。

季春の三月の九日に、出挙の政に擬りて、古江の村に行く道の
上にして、物花を属目する詠、并せて輿の中に作る歌

波谿の崎を過ぎて、巖の上の樹を見る歌一首（四一五九）

世間の無常を悲しぶる歌一首并せて短歌（四一六〇）四一六一）

予め作る七夕の歌一首（四一六三）

勇士の名を振はむことを慕ふ歌一首并せて短歌

（四一六四）四一六五）

右の四一五九〜四一六五では、総題によって四つの歌が一括されてはいるものの、それらの内容面での関連は容易に見て取ることができない。ここに総題を掲げているのも、「三月九日」（天平勝宝二年）に近い日に詠まれた歌を単に一括しただけかもしれず、形の上

でのまとまりを、ただちに歌の内容の関連に結びつけてよいのかどうか躊躇されもする。

この一群の歌について、伊藤博氏は、日付の状況からこれらが内面的関連を有するであろうと指摘し（「大伴家持の手法」萬葉第一百七号）、橋本達雄氏は、四つの歌の解読を通して相互の関連を具説している（「天平勝宝二年三月、出挙の歌」『大伴家持作品論攷』）。本稿の見るところ、両氏の論は当面四つの歌の本質を解明するための正しい方向を示していると思われる。ただし、このことを保証するためには、この歌群の前に掲げられた総題が、どのような役割を果たしているのかを明らかにする必要がある。総題が「三月九日」という日付を持つことから、その日付と歌の連作性とのかわりも検討すべき課題となる。これらの点については、両氏の論によって言いつくされたとはかならずしもえない。そこで、以下四つの歌を検討し、各々の歌の関連を明らかにすることを通して、この歌群に総題が掲げられていることの示す意味を考えてみたい。

二、四つの歌群

(1) 「つまま」を見る歌

洪谿の崎を過ぎて、巖の上の樹を見る歌一首樹の名はつまま

磯の上のつままを見れば根を延へて年深くあらし神さびにけり

(四一五九)

右の歌は、題詞の「巖の上の樹を見る」と歌の「磯の上のつままを見れば」とによって、総題にいう「物花を属目する詠」に対応することが知られる。つまり、一首は、年を経てなお繁茂する巖上の「つまま」を見てほめる老樹讚美の歌であることが明らかである。

第三句の「根を延へて」は、根が盛り上がる特性を持つという「つまま」の老樹（鴻巣盛広『北陸萬葉集古蹟研究』五九頁）が、岩に根を絡ませて立つ厳めしい姿を想起させる。そうした老樹の年輪を表現する「年深し」は、次の駱賓王や李嶠の詩に見られる漢語「年深」の翻読語と思われる（『新潮古典集成』頭注）。

行きて鴟夷の没するを嘆き、遽きて湛盧の飛ぶを惜しむ。地古くして烟塵暗く、年深くして、館宇稀なり。山川は四望するに是あり。人事は一朝にして非ず。（『夕に舊呉に次す』駱臨海集箋注卷五）

舊宮賢臣相築き、新苑聖君来たる。運改まり城隍變じ、年深くして、棟宇摧く。後池水を復することなく、前殿灰となること久し。（『長安故城未央宮に幸して制に應ずるに奉和す』全唐詩卷六十二）

右において、詩人は、往古に栄えた土地や宮が衰微していったありさまに深い詠嘆を寄せている。ここに用いられた「年深」には、

人間の偉業を押し流す歳月を神秘的な存在にとらえる感慨を読み取ることができる。こうした漢語を翻読した「年深し」は、集中、他に二例見られる。^(注2)

(イ) おしるる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして 年深く、

長くし言へば……（4・六一九）

(ロ) 一つ松幾世か経ぬる吹く風の音の清きは年深みかも

(6・一〇四二)

(イ)は家持の叔母大伴坂上郎女の歌、(ロ)は家持が参加した活道の岡の宴での市原王の歌である。(ロ)はいうまでもないことながら、(イ)も、叔母の詠であることとて、おそらく家持の熟知する歌であっただろう。しかも(ロ)は、当面の四一五九と同じく老樹を讚える歌である。清らかな松籟をもたらしただ幾多の歳月への感慨をうたう(ロ)の「年深し」は、漢語「年深」と同様、歳月の重みを強調しているといえよう。家持は、ここから、漢籍に由来を持つ「年深し」を学び、「つまま」の讚美に活用したのだと思われる。このような性格を有する四一五九の「年深し」には、長い歳月にわたる老樹の生命力の横溢に対する家持の畏敬の念を読み取ることができる。そうした感銘から、靈妙さを帯びた崇高な存在として老樹を称揚する結句「神さびにけり」という讚美が、素直に導かれてくる。

古代において、栄えるものを見てそれを讚えることは、タマフリとして重要な意義を持つ行為とされた（土橋寛『見る』ことのタマフリの意義）萬葉第三十九号）。加えて、四一五九の題詞に見られる「——を過ぎて、——を見る歌」という型は、この歌が古くからの国ボメに源を発する物ボメの歌の伝統に連なることを示している（伊藤博『萬葉集の歌人と作品』下、第七章第三節）。とすれば、

繁茂する「つまま」の老樹をうたうことは、すなわち、老樹を見る者と、それが生い立つ越中の国土との繁栄を願うことを意味する。四一五九は、内容・形式ともに伝統的な讃歌の性格を備え、生産にかかわる重要な「出挙の政」にあたる国守家持の立場にふさわしい歌といふことができる。総題の冒頭部に「出挙の政」が、家持の意気込みをこめるかのように高々と掲げられているのも、故なしとしない。

(2)世間の無常を悲しぶる歌

右老樹讚美の歌に続く四一六〇～四一六二では、一転して世の無常がうたわれている。

世間の無常を悲しぶる歌一首并せて短歌

天地の 遠き始めよ 世間は 常なきものと 語り継ぎ 流ら
へ来れ 天の原 振り放け見れば 照る月も 満ち欠けしけり
あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにほひ 秋づけ
ば露霜負ひて 風交り もみち散りけり うつせみも かくの
みならし 紅の 色もうつろひ ぬばたまの 黒髪変り 朝の
笑み 夕変らひ 吹く風の 見えぬがごとく 行く水の 止ま
らぬごとく 常もなく うつろふ見れば にはたづみ 流るる
涙 留めかねつも (四一六〇)

言とはぬ木すら春咲き秋づけばもみち散らくは常をなみこそ一
は「常なけむ」といふ (四一六一)

うつせみの常なき見れば世間に心つけずて思ふ日ぞ多き「嘆く日
ぞ多き」といふ (四一六二)

右の歌を詠むにあたって、『萬葉集全釈』以下に指摘されるとおり、家持は、山上憶良の「世間の住みかたきことを哀しぶる歌」

(5・八〇四～八〇五)を踏まえていると思われる。それ故、先行する憶良歌をより重くみて、家持の歌については、憶良の歌を「模そうとした」(萬葉集私注) 作であるという消極的な位置づけを試みる見解もある。こうした立場からは、

……行く水の 帰らぬごとく 吹く風の 見えぬがごとく
もなき 世の人にして…… (15・三六二五)

み立たしの島を見る時にはたづみ流るる涙止めぞかねつる

(2・一七八)

という先行歌の表現を当面の家持歌が利用していることも、家持歌の独自性を疑う態度を導くことになる。家持歌に対する「概念的」(萬葉集総釈)「形式的」(萬葉集全註釈)という批判の二因は、ここに由来すると思われる。しかし、本稿の見るところ、家持歌の構成や表現には、憶良歌とは異なる配慮が見受けられる。当面の歌が憶良歌を踏まえていることについて、単なる模倣と認めてよいのかどうかは、その点を検討した上で判断すべきであろう。

憶良の長歌(八〇四)は、冒頭に逃れようのない老苦の定めを述べ(八句)、以下、盛りにある娘子の老いゆく姿(一六句)と雄々しさを誇る男の老いゆく姿(二八句)とを対比させて、最後に「たまきはる命惜しげど為むすべもなし」という悲嘆で結ばれている。この反歌一首は、老いと死とを「世の事理」として確認している。こうした憶良歌の構成は、人間の宿命としての無常を執拗に迫る視点によって貫かれているといえよう。

対する家持の長歌(四一六〇)は、冒頭六句の総論以下、自然の上に具現する無常と人間の老いの中に見える無常とを

天の原……もみち散りけり(一二句)

紅の……うつろふ見れば(一二句)

と対比させ、末尾三句で嘆きをうたう。中ほどに位置する「うつせみもかくのみならし」は、自然と人間とのありさまを強く結び合わせ、無常という定めが万物を覆う宿命であることを主張する。家持は、自然と人間とに等しく一二句ずつを配し、双方を平等に重視することによって、「世間無常」という思考をより普遍的な視点でうたおうと意図したのであろう。このことは、反歌二首が、それぞれ自然の無常と人間の無常とを承けて詠まれている点に、はっきりと示されている。

憶良歌と家持歌とのこのような構成面での相違は、家持の長歌が、「紅の色もうつろひぬばたまの黒髪変り」と、女性の容姿の描写を用いて人間の老いを表現していることとも関連すると考えられる。家持歌のこの部分は、憶良の長歌(八〇四)に見られる、

……蟋蟀の腸 か黒き髪に いつの間か 霜の降りけむ 紅の
面の上に いつゆくか 皺が来りし……(五・八〇四)

に学んだ表現であろう。しかし、憶良歌の本旨は、後半に展開される男の老醜をうたう二八句にあると思われる(井村哲夫「憶良と虫麻呂」一一八頁)。序の「一章の歌を作り、もちて二毛の嘆きを撥ふ」という言を考え合わせれば、その二八句は憶良自身の姿の投影と見る事ができる。

それにもかかわらず、家持は、憶良歌の主眼をなす部分は採らずに、人間の無常の具象として、視覚的な効果を持つ「紅」「黒髪」という女性の容姿のうつろいを取り上げている。憶良や家持自身の「二毛の嘆」に直結する男の老醜の姿をあえて切り捨てることによって、無常という宿命から逃れ得ない人間の姿が、一旦は客観視さ

れ、その上で自然のありさまと対置されることとなる。こうした表現上の配慮は、人間であるか否かを問わず、万物の本性を無常であることと見る家持の思考に基くと考えられる。つまり、憶良歌が、憶良自身の姿を投影しつつ、あくまでも人間の盛衰を視点に据えて「世間無常」をとらえるのに対して、家持は、人間もまたその「世間」に包摂される一個の存在であるという立場をとる。ここに、憶良歌と家持歌の際立った相違を認めることができよう。

さらに第二反歌(四一六二)において、家持は、「世間に心つけずて」と、無常の世の中への執着を絶ち切ろうとする態度をとる。しかし、逆接的な呼吸で「思ふ日ぞ多き」と続けて、万物を覆う無常という宿命から逃れようとしつつも、逆に世の中の無常を凝視せざるを得ない心の葛藤をうたっている。「世間無常」に対するこうした内省的な思索は、それが家持の心底深くしみ透った思考であることを窺わせる。

家持は、このような深い思索を重ねることによって、「世間の無常を悲しむる歌」に見られる構成や表現に至り着いたのだと思われる。何よりもまず、家持歌の整った構成が、「世間無常」という思考を熟慮の上で整然と説こうとする家持の意図を示している。その際に家持の念頭にあった憶良歌を十分に読解し、その本質を見抜いていたからこそ、前述のような憶良歌と家持歌とのきわやかな違いがもたらされたのであろう。そうした過程を経ることによって、家持歌は、憶良歌の単なる模倣にとどまることなく、家持独自の作として成り立っている。このように見ると、ここで憶良歌を踏まえたことは、憶良歌に積極的に学びつつ先行歌の表現をも吸収しながら、独自の手法によって「世間無常」という思いを創作に託そうと

することの現われであるといえよう。総題にいう「興」とは、家持のこうした態度を意味すると考えられる。ならば、この「興」は、何によって呼び込まれたのであろうか。

「世間の無常を悲しむる歌」の前に詠まれた老樹讚歌「物花を属目する詠」（四二五九）の持つタマフリとしての意義を考え合わせれば、四二五九と「世間の無常を悲しむる歌」とは、繁栄の願いと無常に対する悲嘆という対立する構図として理解される。だが、「世間無常」の思いを深く抱く家持が、「つまま」の溢れる生命力を目にした時、老樹を讚美するにとどまっていたとは考えにくい。家持の思考は、おのずと、老樹の繁栄とは対極にある世の中の無常のさまに及ぶことになったと思われる。「世間の無常を悲しむる歌」が、家持の思考の必然的な流れに従って老樹讚歌に続いて詠まれた作であるならば、総題の「物花を属目する詠、并せて、興の中に作る歌」という表現は、単に両者を「対として取り上げただけではなからう。そこにいう「并せて」とは、両者の間にある内面的な関連に対応する表現と考えられる。

(3) 予作七夕歌

予め作る七夕の歌

妹が袖我れ枕かむ川の瀬に霧立ちわたれさ夜更けぬとに

(四一六三)

右の歌においてまず抱かれる不審は、「三月」に七夕歌が詠まれた点である。七夕の夜のための「予作」と見るには、「三月」はあまりにも早すぎる。しかし、この不審は、末四巻に見られる家持の予作歌や追和歌が、すべて実用的な場の要請からではなく、家持の文芸的な営みの所産であるという伊藤博氏の見解（『萬葉集の表現

と方法』下、第九章第一節）によって解くことができる。この見方に立てば、右の「予作七夕歌」は、来たるべき七夕の日に披露されることが目的ではなく、それ以外の何らかの感興のもとに、七夕歌の体を借りつつ詠まれた歌と見ることができよう。ならば、その感興とはいったい何かという疑問が生じてくる。

当面の歌について、次の憶良の七夕歌、

彦星の妻迎へ舟漕ぎ出らし天の川原に霧の立てるは

(8・一五二七)

を心に置いて詠まれているという指摘（『新潮古典集成』頭注）がある。前述のごとく、「予作七夕歌」の前に詠まれた「世間の無常を悲しむる歌」は、憶良の「世間の住みかたきを哀しむる歌」を踏まえている。右の指摘に従えば、家持の思いは、そこからさらに憶良の七夕歌一五二七に及び、それを踏まえて「予作七夕歌」が詠まれることになったという流れが、ひとまず推測される。だが、このことを確認するためには、家持が「世間無常」を取り上げるところをきっかけとして、何故、憶良の歌々の中でもとくに七夕歌を想起したのかという点を考える必要がある。右の七夕歌一五二七を含む憶良の七夕歌群（8・一五一八〜一五二九）は、家持も滞在したことのある大宰府で詠まれた歌を核として構成されている。それらは家持の記憶の中にあったと見てもまちがいない。その七夕歌群の中の一五二〇〜一五二二について、伊藤博氏は、二星の「苛酷な宿命」と人の世の「すべなき」とを結び合わせた作と論じている（『憶良七夕歌の意義』美夫君志第三十四号）。世の中をすべなきものにとらえるのは、憶良文学の根底に通う認識といえる。その態度はたしかに憶良の七夕歌の中にも貫かれている。

家持が「世間無常」という思考に向き合い、憶良の「世間の住みかたきことを哀しぶる歌」を回想した時、このような憶良の七夕歌一五二〇～一五二二に思い至ったのであろう。年に一度の逢瀬のみが許される天界の二星は、無常を嘆く人間と同じように、抗うことのできない宿命に支配されている。憶良の七夕歌一五二〇～一五二二に思い及ぶことよって得られた二星への共感にうながされて、家持は、時ならぬ「三月」に七夕歌を詠んだのだと考えられる。

このように見ると、「予作七夕歌」が牽牛の立場の詠であることが、あらためて注目される。一首の主旨は、結句「さ夜更けぬとに」によると、七夕の夜、牽牛が渡河に臨む場面をうたう点にある。その牽牛の願い「霧立ちわたれ」は、『萬葉拾穂抄』以下の多くが指摘するとおり、夜霧に紛れて逢瀬を遂げようとする心情を背景に持つと思われる。とすれば、ここでは、夜が明けるまでに「霧」の立つことが、二星の逢会の成就にとって必要な条件として詠まれているといえる。

それ故、一夜のうちに「霧」が立たなければ、二星の負う宿命が、長い別離をもたらすことになる。そこに、上二句に「妹が袖我れ枕かむ」とうたわれるとおり、牽牛が織女との逢瀬を心待ちにする所以がある。上二句にこめられている牽牛のこうした願いは、そのまま家持自身が抱く思いであったのではなからうか。「世間無常」という宿命に悲嘆を深めてゆく時、家持の心には妻坂上大嬢に対する押えがたい愛情が涌き起ったにちがいない。この一首において、家持は、その愛情を牽牛の立場を借りてうたっていることができよう。

以上の考察によれば、「予作七夕歌」は、「世間の無常を悲しぶる

歌」に端を発した感興によって必然的に呼び込まれたといえる。その感興とは、世の中の無常に相対した時に家持の心中に抱かれた妻への愛情であった。そうした思いを、憶良歌への追憶を拡げることによって七夕歌の体でうたおうとするところに、「予作七夕歌」の「興」があると考えられる。ただし、この場合、憶良の一五二〇～一五二二は、二星の宿命を嘆く歌である。「予作七夕歌」を詠むにあたって、家持は、憶良の七夕歌群の中でもとくに、七夕当夜の場面をうたい、「霧」という素材も共通する先掲の一五二七を念頭に置いていると思われる。とすれば、「世間の無常を悲しぶる歌」と「予作七夕歌」とは、内面的関連によって結ばれていると同時に、ともに憶良歌を踏まえつつ家持の心情に即応する表現を持つ点で、同じ「興」の中に詠まれていると見なすことができる。

(4) 勇士の名を振はむことを慕ふ歌

勇士の名を振はむことを慕ふ歌一首并せて短歌

ちちの実の 父の命 ははそ葉の 母の命 おほろかに 心尽
して 思ふらむ その子なれやも ますらをや 空しくあるべ
き 梓弓 未振り起し 投矢持ち 千尋射わたし 剣大刀 腰
に取り佩き あしひきの 八つ峰踏み越え さしまくる 心障
らざ 後の世の 語り継ぐべく 名を立つべしも (四一六四)
ますらをを名をし立つべし後の世に聞き継ぐ人も語り継ぐがね
(四一六五)

右の二首は、山上憶良臣が作る歌に追ひて和ふ。

右にあげたとおり、「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」は、左注に憶良の名をはっきりと掲げている。それ故、この歌が憶良の、士^あやも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして

(6・九七八)

に追和する作であるという『萬葉代匠記』以下の見解には疑問の余地がない。

右の家持の長歌(四一六四)は、憶良歌(九七八)の上二句を前段の末尾三句「ますらをや空しくあるべき」に承け、下三句を後段の末尾三句「後の世の語り継ぐべく名を立つべしも」に配する構成を持ち、反歌(四一六五)は、その二つをまとめる形をとる(『新潮古典集成』頭注)。橋本達雄氏の指摘(先掲「天平勝宝二年三月、出挙の歌」)にあるとおり、憶良歌をきれいに二分して踏まえる形に、この歌の左注が憶良歌への追和を明示する所以を求めることができよう。

しかし、憶良歌の「士まろ」と家持歌の「ますらを」との間には、看過できない違いがある。小島憲之氏は、憶良歌の「士」の表記や結句に見られる「立名」の志の由来を、次のような漢籍に求めている(『上代日本文学と中国文学』中、第六章〔一〕)。

僕之を聞く、身を脩むるは智の府なり。施しを愛するは仁の端なり。取與は義の表なり。恥辱は勇の決なり。名を立つるは行ひの極なりと。士に此の五者有りて、然る後以て世に託して、君子の林に列すべし。(司馬子長「任少卿に報ずる書一首」文選卷四十一)

士は賢不肖と無く、皆名を世に立て、むことを樂しぶ。(朱叔元「幽州の牧と為り 彭寵に與ふる書一首」文選卷四十一)

芳賀紀雄氏は、この指摘を踏まえた上で、

又、五位已上に詔して、賢良方正の士を挙げしむ。(続日本紀、大宝三年七月五日詔)

詔して曰く、人の五常を稟くるに、仁義斯く重く、士の百行有るに、孝敬を先とす。(続日本紀、養老四年六月二十八日詔)などを合わせ見ることよって、「学識、徳行の意」が、憶良歌の「士」に強くこめられていると論じている(憶良の辞世歌)叙説第十二号)。これによれば、この「士」には、死を意識した病床で、なお名を立てることを願う憶良の強烈な自負を見て取ることができよう。

こうした「士」に対して、「ますらを」は、

嚴すら行き通るべきますらをも恋といふことは後悔ひにけり

(11・二三八六)

ますらをの聡き心も今はなし恋の奴に我れは死ぬべし

(12・二九〇七)

のように、強く立派な男子を意味する。これに加えて、この言葉については、官人意識を伴って用いられるという指摘(上田正昭『日本古代国家成立史の研究』三六五頁)もなされている。家持歌の「ますらを」が、題詞の「勇士」に対応することを考え合わせれば、家持の抱く「ますらを」像とは、勇武をもって朝廷に仕える官人ということになるう。このことは、次の家持歌の表現によっても保証される。

……ますらをの 心振り起し 剣大刀 腰に取り佩き 梓弓

取取り負ひて 天地といや遠長に 万代に かくしもがもと

頼めりし 皇子の御門の……(3・四七八)

ますらをの心思ほゆ大君の御言の幸を聞けば貴み

(18・四〇九五)

家持が、憶良歌の「士」を「ますらを」に転じて承けたのは、両者

のこのような違いを考慮してのことと思われる。

家持がことさらに勇武を鼓吹する背景には、

……おほろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の

氏と名に負へる ますらをの伴 (20・四四六五)

とうたわれるとおり、古来の武門大伴氏の伝統を担う家持の自負を見て取ることができよう。こうした自負に支えられて発せられた「空しくあるべき」という自問は、「世間の無常を悲しぶる歌」に詠まれた、無常の世の中に対する悲嘆と無縁ではなからう。世の中の諸相を凝視し、その中で自らもまた背負っている無常という宿命に悲嘆を深めてゆく時、その宿命を克服する方途として「勇士の名を振はむ」ことを願うのは、家持の「ますらを」意識の自然に赴くところであったと思われる。死を目前にしながら、名をあげること
を「涙を拭ひ悲嘆しび」(九七八左注) つつ願った憶良と家持との接点を、ここに認めることができる。

と同時に、家持は、「世間無常」という思いに向き合うことによつて、「無常を具現する世間に接しつゝ、家族の愛だけは、唯一の確固とした礎として積極的に認めようとする」(芳賀紀雄「山上憶良―子等を思ふ」の歌) 国語国文第四十四巻第四号) 憶良の姿勢を想起したのではなからうか。周知のとおり憶良には、子等を思ふ歌一首并せて序 (5・八〇二―八〇三) 「老身に病を重ね、経年辛苦し、さらに児等を思ふ歌七首」(5・八九七―九〇三) など、子への愛を正面から取り上げる作がある。家持の長歌 (四一六四) の前段において、「ますらを」に注がれる父母の愛情が、「おほろかに心尽して思ふらむその子なれやも」と主張されるのは、こうした憶良の姿勢に触発されたことであろう。「なれやも」という反語に

よる否定は、続く「ますらをや空しくあるべき」が、父母の慈愛に支えられた決意であることを強調している。

このように憶良の姿勢を着実に継承する前段に対して、後段では「勇士」の理想像が具体的にうたわれている。後段の八句「梓弓……八つ峰踏み越え」については、憶良の「世間の住みかたきことを哀しぶる歌」の

……ますらをの 男さびすと 剣大刀 腰に取り佩き さつ弓
を 手振り持ちて…… (5・八〇四)

を心に置くという「萬葉集注釈」の指摘がある。家持は、当該の八句の他にも、

……ますらをの 心振り起し 剣大刀 腰に取り佩き 梓弓
取取り負ひて…… (3・四七八)

……梓弓 手に取り持ちて 剣大刀 腰に取り佩き……

(18・四〇九四)

など、類同の表現を用いて「ますらを」の理想像を造型している。この表現に至り着く際に、家持は、右の憶良歌の表現を想起したのであろう。あたかも常套句のように繰り返される「ますらを」像への憧憬は、武門の一族としての家持の矜持の体現と見ることができ
る。家持にとって、「立名」の志を実現する理想の途は、

剣大刀いよよ磨ぐべしいにしへゆさやけく負ひて来にしその名
ぞ (20・四四六七)

とうたわれるとおり、勇武を誇る氏の名をさらに高からしめることにはかならない。すなわち、家持は後段において、憶良と「立名」の願いを共有しつゝ、その具体像に家持自身の理想をあててうたっているといえる。ここに家持独自の立場を鮮明に打ち出すことによ

って、長歌の前段と後段との末尾を合わせた反歌(四一六五)は、おのずと憶良への共感と家持自身の理想とを合わせ持つことにならる。

「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」に対する以上の読解によれば、その左注にいう「追和」とは、憶良の思考に深い理解を示しつつ、家持の抱く「立名」の志をもって憶良に応えようとする試みであるといえよう。これに対して、「世間の無常を悲しむる歌」と「予作七夕歌」とは、ともに憶良歌を念頭に置いて、それに導かれつつ家持の思考を独自にうたう作ととらえることができる。つまり、「興の中に作る歌」として括られている三つの作は、それぞれが憶良歌を踏まえる点では共通しながらも、その中の最後の作「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」だけが憶良歌(九七八)に直接訴えかける内容を持つ。前述のごとく、この歌は、憶良歌をきれいに二分して承ける形をとる。このことに加えて、「世間の無常を悲しむる歌」「予作七夕歌」とこの歌との右のような性格の違いを考慮した上で、家持は、「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」のみに、憶良への「追和」を明示する左注を掲げたのであろう。この左注によって、家持は「世間の無常を悲しむる歌」以来、その心底にあった憶良への追慕を明らかにし、見事な「追和」の手法のもとに憶良歌に応じることによって、一連の「興」をうたい収めたのだと思われる。

三、歌群の構成

以上、見てきたように、総題を掲げる四一五九と四一六五の歌は、老樹讃歌である「物花を属目する詠」(四一五九)と、「世間の無常を悲しむる歌」にはじまる一続きの感興のうちに詠み継がれた

「興の中に作る歌」(四一六〇と四一六五)とから成る。しかも、「興の中に作る歌」に括られる三つの歌は、山上憶良の述作を踏まえる点で共通し、一まとまりをなしている。中でも、「予め作る七夕の歌」(四一六三)と「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」(四一六四と四一六五)とは、それぞれ妻への愛情と立名の志という人事にかかわる事柄を詠む歌として共通する。

こうした四つの歌の位置づけに加えて、冒頭の老樹讃歌と、続く「世間の無常を悲しむる歌」とは、恒久と無常という対比をなすと思われる。また、「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」に詠まれている立名の志は、古来の名門大伴氏の名を称揚し、後世に長く語り伝えようとする願いである。これは、老樹讃歌における恒常不変の繁栄に対する賞讃を、人事の上からうたうものにとらえられるであろう。とすれば、「興の中に作る歌」の最初の作「世間の無常を悲しむる歌」と、最後の作「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」とは、意味合いが異なるものの、ともに「物花を属目する詠」に対応することになる。

右に述べた構図を一連の歌四一五九と四一六五に認めると、「世間の無常を悲しむる歌」の長歌(四一六〇)に見られる、「総論(六句)↓自然の無常(二二句)↓つなぎ(二二句)↓人間の無常(一二句)↓悲嘆(三三句)」という構成の果たす役割が、明らかにようになってくる。すなわち、四一六〇においては、「つまま」をうたう四一五九の自然の恒常性を承けるようにして、まず自然の無常がうたわれる。次に配されている人間の無常は、続く「予め作る七夕の歌」と「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」という人事にかかわる二つの歌につながっている。これによって、四つの歌は、冒頭から末尾まで

なめらかな流れで読むことができる。この流れの中で、「世間の無常を悲しむる歌」は、自然と人事とをつなぐ役割を見事に果たしているといえよう。

このことに関連して、「世間の無常を悲しむる歌」の反歌二首が持つ異文も注目される。第一反歌(四一六一)の「二云」が「常なけむとぞ」とやや間接的な表現で無常をうたうのに対して、本文は「常をなみこそ」と断定的になつてゐる。第二反歌(四一六二)では、「二云」に「嘆く」とあるのに対して、本文は、「思ふ」とより思念的表現をとっている。反歌二首の本文が、ともに異文よりも断定的な重い口調で世の中の無常を強調することによって、「予め作る七夕の歌」と「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」とに詠まれてゐる妻への愛情と立名の志とは、一連の流れの中でさらに際立って印象づけられる。こうした点を考慮すると、反歌二首の異文はともに家持の初案であり(『新潮古典集成』頭注)、本文への改作は、四つの歌全体の流れを見通した上でなされたものと考えられる。このようにして得られた一連の歌の構成は、家持にとって得心のゆく図であつたのだろう。その自信が、四つの歌の前に総題を掲げるといふ形を導いたのではなからうか。

こうした見方に立つと、四つの歌(四一五九〜四一六五)が一連の流れを持つ歌群であることを示す指標として、総題をとらえることができよう。つまり、四つの歌それぞれの詠まれた時が、総題に記された「三月九日」から次に現われる日付「三月二十日」(四一六六〜四一六八左注)の間のいつであるかにかかわらず、四つの歌全体が「三月九日」の作として提供されていると考えられるのである。

このことは、末四巻に収められている歌と日付とのかかわりに一つの見通しを提示する。伊藤博氏の論(『萬葉集の構造と成立』下、第十章第二節)によれば、末四巻には、詠まれた日時を明らかにする歌(以下〇印で表す)と、その日時を記さない歌(以下×印で表す)とが、「〇+×」の同居構造をなすという原則が貫かれ、この形は、末四巻の原形態である家持の歌稿保管のあり方に由来するといふ。当面の四つの歌は、「三月九日」といふ日付に統括される上に、内面的にも緊密なまとまりをなし、伊藤氏の論の一証となる。さらにこの歌群は、他の「〇+×」の同居構造においても、日付がその歌の時間的な位置を示すと同時に、〇と×との両者の内容上の関連をも示している可能性を持つことを示唆している。

こうした日付と歌の連作性との緊密なかわりは、家持が、歌を連として詠もうとする強い要求と時間に対する細やかな配慮とを持つていたことを告げている。その一端は、初期の代表作と目される、「亡妻悲傷歌」(三四六二〜四七四)の中に、すでに窺うことができる(先掲「大伴家持の手法」)。とすれば、歌の連作と時間への関心とは、その後の家持の創作方法の発展を見定める上で、念頭に置くべき重要な事柄であると認められよう。時間の流れにそつて継起する感興を自由に詠み継ぐことが、家持のうちに必要欠くべからざる要請としてあつたからこそ、家持は歌稿の保管にも細心の注意を払つたのではなからうか。そのような連作の試みと時間への配慮とが、末四巻の家持歌に独自の、日付によって歌の連作を統括するという歌群のあり方をもたらしたのであらう。本稿で取り上げた総題を掲げる四つの歌は、日付と歌の連作とのこうした連繋が、末四巻の中で見事に結実した典型であると思われる。

注(1) この他にも総題を持つ歌として19・四一七七・四一八三、20・四一九三・四一九四があるが、前者は時鳥を扱う歌として一貫し、後者は贈答として組をなす。

(2) 「いにしへの古き堤は年深み、池の渚に水草生ひにけり」(山部赤人、3・三七八)は「池」の縁語として「深し」が用いられているとも考えられるので、ここでは保留しておく。

(3) 稲岡耕二氏は、八〇四の用字から、異文系統が大伴氏所伝の形で、撰定後の本文系統と照らし合わされて、家持の用字を交えつつ書き加えられたと推定されている(『萬葉表記論』四四二頁)。この異文系統が娘子の部にもますらをの部にも二八句ずつを配し、整った形を持つという伊藤博氏の指摘(『萬葉集の表現と方法』上、第四章第五節)によれば、四一六〇の整った構成は、八〇四の異文系統を意識した結果と考えられる。

(4) この「土」の訓には、ヲノコとヲトコとの両説がある。だが両者を見比べると、ヲノコは勇猛さを強調する文脈に用いられることの多い語(20・四三三一など)、ヲトコは女に対する男性を示す文脈に用いられることの多い語(20・四三三三など)であることと、憶良歌の土にこめられた自負とを考え合わせるなら、ヲノコの方がより適切と考える。

稿をなすにあたって、伊藤博教授の御指導をいただいた。

筑波大学博士課程文芸・言語研究科日本文学)

『日本語と日本文学』バックナンバー (1)

第一号 (昭和56年6月発行)

馬淵 和夫 「くた」の語源

西原 千博 「聖家族」試解

岡内 弘子 山上憶良嘉摩三部作の成立
——「紅の面の上」を中心として——

小川 栄一 記録体における形式名詞「由」

吉村 弓子 同音語の用法 ——「温かい」と「暖かい」——

桑原 隆 西尾実国語教育論の探求
——島本赤彦の教育論との関係について——

ラッチャーニ・
ヒヤマーワデー
日・タイ語のテンスとアスペクトの対照および教授
法に関する一考察